

東京大学理学部

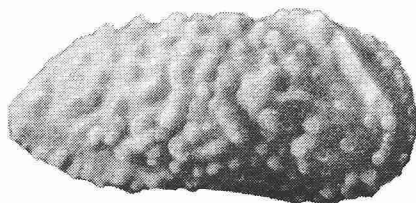
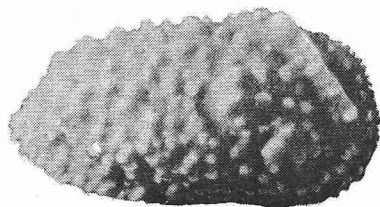
広報

— 7 卷 12 号 —

昭和51年 3 月

目 次

学部長退任のあいさつ	植村泰忠 …… (2)
新幹線から赤富士を眺める	森野米三 …… (3)
大学の植物園 サ・エ・ラ	古澤潔夫 …… (4)
ハイゼンベルク教授を悼む	西島和彦 …… (10)
女性の曲り角	中村圭子 …… (12)
“名誉教授の御近況”	…………… (13)
高宮先生の思い出	飯田修一 …… (19)
私の読んだ本 (28)	
「日本人と近代化学—西洋への 対応と課題—」	清水韶光 …… (20)
<学部消息>	(21~22)



Trachyleberis scabrocuneata (Brady, 1880) の雌雄の
右殻. ×55. 上図 …♀, 下図 …♂

H.M.S. Challenger 号は英国を出発してから約2年半後の1875年(明治8年)4月13日に江戸湾(東京湾)に現われた。船体修理のため横須賀港で約1ヶ月ドック入りした後、日本の南岸と瀬戸内海への航海に向った。航海日誌によると5月12日江戸湾を出て、城ヶ島を廻り、江戸湾の西隣の湾(相模湾)で一日中観測と生物採集を行った。14日潮岬に西進し、オフィサー達は見物のため“串本村”に数時間上陸。15日には神戸沖に停泊し、10日間自由行動が許され、研究者達は古都“京都”を尋ねている。25日神戸を出て明石海峡で採集しながら瀬戸内海を西に進み、26日坂出の西でドレッジしたのが図に示す介形虫を含む st. 233b のサンプルである。

Challenger 号が持ち帰ったサンプルの介形虫に関しては G.S. Brady が1880年に研究をまとめ、日本近海では st. 233b より5新種を含む3属9種(現在では9属9種)が記載された。この中で、図に示したものは *Trachyleberis* 属の模式種になっており、現在 British Museum に保管されている雌雄の副模式標本の右殻である。雌は卵を抱くためぶんぐりと短かく横にふくらみ、雄は細長くスマートであるが、殻の後半分を占めるほど生殖器が異常に大きい。この種類だけでなく、同時に記載された8種の介形虫は日本の各地の浅海に生息し、また化石として日本各地の第三紀層から発見される。このため Challenger Report は化石の研究者にとって重要な文献となっている。(地質: 池谷仙之)

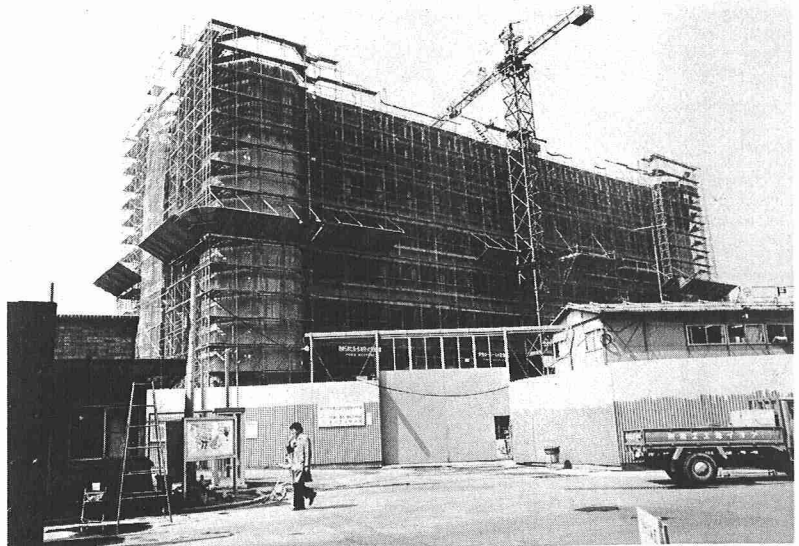
学部長退任のあいさつ

本年3月末日で任期満了となりますので学部長を退任することになりました。非力な私が3年間何とかその任に耐えられましたのも、理学部内外の多くの方々からおよせいただいたお力添えと御寛容とによるものでありまして、退任に当り心から御礼申し上げる次第です。

新学部長のもと、新たな気分で理学部が一層充実に向うことを期待してごあいさつと致します。皆様どうも有難うございました。

昭和51年 3月31日

植 村 泰 忠



建設途上の理学部5号館 — 51.3.18 竜岡門にて撮影 —
(28mm 広角レンズ使用)

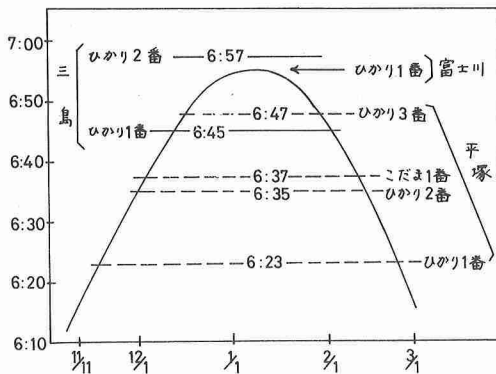
新幹線から赤富士を眺める

森 野 米 三 (化学・名誉教授)

まだ学生であった頃、それは晩秋のことであったが、山中寮で始めて眺めた日の出の富士はまことに印象的であった。あけやらぬ空を背景としてそゞり立つ富士が、あかねに映え、そして刻々に色をかえてこがねに輝き、そのはてに山肌の一つ一つをはっきり見せて来る移り変りは、この世のものとは思えぬものであった。

その後も富士はいろいろの場所から眺めて来たが、場所がかわればそれぞれに趣きを変える。大観や、林武、梅原龍三郎など多くの人々が、富士を画いて厭くことを知らなかった気持は、私達に共通のものといえようか。

新幹線で往復するようになって、昔の東海道線より高い位置から眺めた富士は、一段とその高さを増した感じである。車窓から眺めている内に、昔の山中寮での感激を思い出し、この列車の内から赤富士が見えないであろうかと考えるようになった。



日の出時刻(静岡)と新幹線の列車時刻

赤富士を眺めるためには、日の出時刻に、(日の入りの赤富士もあるが、それはひとまず考えないこととする)、富士の見える場所に居ることが必要である。新幹線から富士を眺める最良の位置は、まず三島駅である。一方、日の出の時刻は一年中日々に変化する。かりに理科年表で静岡の日の出時刻を探ると上図の通りで、ひかり1番列車は三島駅を6時45分に通過するから、この日の出時刻に三島に居ることのできるのは、12月13日前後と2月3日前後

に限る。富士が赤く映えるのがこの日の出時刻(それは静岡で海面の高さのもの)の前後何分であるかによって、上記の期日の前後の数日が可能な期間となる。ひかり2番列車は三島駅を6時57分に通過する。赤富士が、日の出時刻のあと2分以上つゞいているならば、日の出のおそい元旦前後には、ひかり2番列車で赤富士を見ることができよう。

新幹線は三島を過ぎてから、愛鷹山の丘陵の蔭に入ると、富士は見えなくなるが、富士川の辺に来て富士は再びその全貌をあらわす。この間の距離は約25kmで、ひかりで約10分かゝる。それ故に、元旦前後のひかり1番列車に乗れば富士川附近で赤富士が見られるかも知れない。もっとも富士川附近はいささか西へ廻りすぎて赤富士を斜めに見る嫌いはまぬがれない。

ともあれ、三島(富士川を含めて)で赤富士を見るためには、ひかり1番または2番列車に乗らなければならない。たゞし冬の間の限られた期間だけしか可能性はない。

赤富士を見るチャンスは上述の場所の他に今一つの可能性がある。それは新横浜を過ぎて暫くした所、相模川を渡ってから小田原に着く手前(平塚市の北部にあたる)で、三島ほど近くに見えないのであまり気付かれていないが、箱根の山々と丹沢の大山との間に、富士はその山容をかなり大きく見せる。この場所はひかりで東京駅から約23分、こだまでは新横浜駅から約15分である。この2月号の時刻表から計算すると、左の図の点線で示したように、この場所で日の出に遭うチャンスは、

ひかり1番は11月18日前後と2月25日前後

ひかり2番は12月2日前後と2月13日前後

ひかり3番は12月16日前後と2月1日前後

こだま1番は12月4日前後と2月11日前後

の4列車となる。赤富士が、日の出時刻の前後に何分見えるかによって、上記の期日の前後に数日の可能性がきまることとなる。

さて、最後に、上に述べた推測を実際に確かめた経験を述べたい。期日は12月16日で、問題のこだま1番に乗った。しかしずっと昔(昭和44年)のこと

であったので、列車のタイムテーブルは現在のものとは違っていた。平塚を通る時刻は日の出時刻の3分前の予定であった。もちろん雲や霞があつては赤富士は見えないから、前々から天気予報を眺めて大丈夫と思われる日を選んだ。いくら天気が良くても、見えるか見えないかは現地に行つて見なければわからない。そこにスリルがある。まだ暗い内に起きて東京駅からこだまに乗った。空は満天の星であった。品川を過ぎる頃ようやく空がしらけ始めたが、相模川を渡った所で、予想通り、紫がかつた富士を見た。この場所ではやゝ長く、2分半ばかりの間富士を眺めることができるが、紫から赤に変わった所で、残念ながら富士は箱根の山に隠れた。丹那トンネルを出るまで、どうなっているかワクワクしていたが、三島に来て見ると、すでに日は高く昇つて、真白の富士になっていた。天気がよくて、宝永山の上から昇る雪煙がはっきり見えた。

以上が私の経験である。上には、静岡の標準の日

の出の時刻をもとにして考えたが、赤富士が見えるのはこの時刻の前の何分であるか、それとも後の何分であるかが問題である。赤富士となるためには太陽の光があたらねばならないから、日の出時刻以後のものであると単純にはきめられない。事実、さきのこだま1番では平塚で日の出時刻以前に赤富士を見ている。それは、富士山頂は海面線よりも日の出が8分程早いはずであるからである。富士が赤く映える時刻は、麓の日の出時刻にくらべてどうなっているのだろうか。

そもそも美事な赤富士が見られるためには、地平線上の雲のたゞずまいがどんな有様であることが望ましいか、また富士山のまわりでどうあつてほしいか、などがもっと興味ある問題である。それによつて、新幹線から赤富士が見える期間もはっきりできるであろうと思う。近頃山中湖畔のホテルで、富士を見ることを売物にしているホテルがあるが、一つの場所に腰をおちつけてこれらの関係をじっくりしらべて見たいものである。

大学の植物園 サ・エ・ラ

古 澤 潔 夫 (植物園)

はじめに：植物園に20年以上も奉職していた私は、国立大学の植物園とは何か、ということが常に頭からはなれませんでした。退職に際して、国外のあちらこちらの、主として国立の乃至国立大学の植物園について、見てきたこと、考えさせられたことを、具体的には、バルカン地方、南欧、中央ヨーロッパ、北欧の各地方順にそれぞれ1,2の例を選び、つづつてみたいと思います。

ユーゴスラビア共和国々立Trsteno植物園は、アドリア海に臨むDubrovnik市の郊外にあって、市の給水のための水源地でもある。Dubrovnik(旧名Ragusa)(=Eichendorf)は、その名が示すように、カシの木の本の村を意味し、附近一帯にカシ類(ここでは*Quercus ilex*)に限らず、温暖な地中海沿岸の気候に影響されて樹木の多いところで、また中世以来の厳しいアリストクラティックな政治体制と統治組織によつていたRagusaも、甚だ特殊な都市国家であったが、古くから国外遠隔地との交易が盛んで海外各地から多くの植物が集められていた。この植物園の歴史も古く、1502年に、この地に宮殿が建設され、その庭園が造営されたのが園の創始であつ

た。園内の樹種の多いことと、その生育のみごとなことは驚くばかりで、見馴れた種類の樹でも、高さや、樹令だけでなく、よく枝をはつた樹形全体の量感に圧倒された。現在、この国の科学アカデミーのもとのある生物学研究所(本部はZagreb市にある—後述)に属する。

また別に、Dubrovnik市の対岸の海上にある小島Lokrumは島全体が植物園として管理されている。これは、園内が典型的な地中海的植生で占められ、自然保護地域に国から指定されている。こゝには一部に地中海特有の*macchie*(第2次大戦中、ナチスに対する、レジスタンス・グループのマキエ団の名で知られた、深く茂つた叢林-ブッシュ)が発達しており、それ以外は、高木の樹林でおおわれたArboretum(樹木園)でもある。この園の起源は、オーストリーのHabsburg家のMaximilian(Franz Josefの兄弟)が、この島を買つて、ここに小さな居城をかまえ、19世紀のほぼ中葉、周囲に大きな庭園を造つたのはじまり、現在、居城のあとは、自然史博物館となっている。

Sarajevo 大学の植物園。Sarajevo 市は、ユーゴ連邦内のボスニア・ヘルツェゴビナ共和国の主都で、Ivan 山脈によって、アドリア海からは、さえぎられた内陸気候地帯にあり、附近の植生も沿岸地方とは対照的である。アドリア海に注ぐ Milijazka 河の左岸にひらけた Sarajevo 市の大学には、次の3つの植物園がある。

1. Botanički Vrt Zemaljskejmusel (Hortus Botanicus Sarajevoensis)
2. Planiska Botanička Basta Trebevič Sumarski Fakultet.
3. Botanička Basta Alpinetum Sumarski Fakultet Universiteta u. Sarajevo.

以上の諸園にくらべて、Zagreb 大学の植物園は、ユーゴ国内では、近代的設備という点では最も進んだ内容を持ち、その所属は Farmaceutsko-biochemijske Fakultet (薬学・生物化学科)。主都 Belgrad に次ぐ、第2の都会である、この街には、1868年以來ユーゴ・アカデミーの本拠があり、それより以前1669年、既に基礎を置かれた Zagreb 大学は、今一つの植物園 (Botaniske Urt Svencilista Prirodostovno Matematički Fakultet [理学科]) に属する小さい植物園) を持っているが、いずれも、中央ヨーロッパのものとは比較すべくもないこと、いうまでもない。植物園が、立派に整備されていることは、その国の文化の進歩如何とは、うらはらに、国内の緑の自然の豊かさとは、一少くともヨーロッパでは一反比例しているという比喩的な現象か。

イタリー、スイスには大学附属の標準的な、また歴史の古い植物園が多い。有名なものより、特色のあるものを拾うと、北イタリー Aosta に国立の高山生物研究所 (Stazione di Biologia Montana) を持つ高山植物園 Giardino Alpino "Paradisia" があり、この附近一帯、約 60,000 ha が国立公園 Parco Nazionale Gran Paradisia に指定されている。研究所は1864年設立された比較的新しい極めて小規模のもので、今後の課題をかゝえているが、全く快適な北イタリーアルプスの素晴らしい環境のうちにあり、1974年の夏を、この研究所内の宿舎に過したことは好き思い出となった。

研究上の目的でもあった、シャリントウ属 *Cotoneaster* の殆んど南の端の分布状態を、その2種 *C. integerrimus* と *C. tomentosus* についてみる事ができたが、こゝは中央ヨーロッパの多くの種の分布の南限を確かめるのに必要な地域の一つである。禁猟に

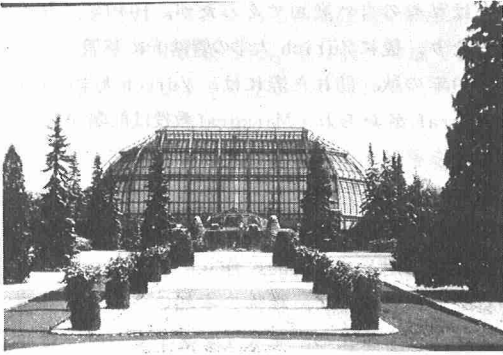
なっている貴重な動物 Steinböck をみかけたが、特産の多数の昆虫もあると聞く。

スイスの東南部の州 Tessin (Tizzino) の Lago Maggiore (マジョル湖) 上に浮ぶ小島 Isole di Brissago 植物園は、現在、Zürich 大学の附属植物園 (本園は Zürich にある) の分園である。嘗て、この島は私有の自然庭園であったが、1949年、州の公有となり、後に Zürich 大学の管轄下に移管された。

1969年の秋、訪れた際には、Zürich 大学の Prof. Markgraf がおられ (Markgraf 教授は前職の München 大学から移った方)、詳しく園の由来について説明をうけた。所謂国有になってから、園内の既存の植生を保存するだけにとどまらず、さらに島という立地条件を活用し、人為的に作り出した植相を、自然のごとくに管理して、植物の本然のすがたを認識するよすがとするため、気象インディケーター植物を選び、アルプス越えの Gothard 峠の向う北側の Zürich 本園と、こちら南側の Brissago 分園とでの比較栽培、暖地植物の試作、たとえば、ソテツ *Cycas* はスイスの国内の他の場所では生育困難なのに、当地では良好な結果が得られる原因は何か、などの問題に就いての生育条件の解析、また、生きた標本館 Herbarium vivum や、生態ロック・ガーデン、さらに全く人為的に制御した植物共同体の unit を作制する試み、たとえば園内に、全く未知の自然界にない未経験な群落として小規模な林を、意識的に作りだし (無意識には、あちこちでやられているが)、植物学の専門家の研究対象としての素材提供を含め、それを超えて、文化全般の領域の活動にたずさわる研究者に、内容豊富な実地の教材を供給するという、やゝ突飛とも思われる課題。このためには、技術者には、植物地理学的、生態学的基礎知識と、生きた造園学上の aesthetic (美学的) なセンスも要求され、一つのフィクションである外来植物の創意的組合せによる未知の植相の創造のため、陽樹・陰樹の組合せ、相互の干渉と平衡を洞察する、基礎と応用の高度な "知恵" が必要となる。こゝの園の技術者のあいだには、同時に、戸外の青空の下での一自然の気温、光、地温などの立地条件が植物育生の基本で、Klimatron、栽培調節温室などは、補助手段にすぎないという、機械文明の進歩による弊害に対する単なるレジストを超えた姿勢もみられた。

スイスには、このほか、Genève 大学に、植物学史のうえでも重要な役割を占める、現在でもよく整備された植物園があり、Lausanne, Basel, St.Gallen

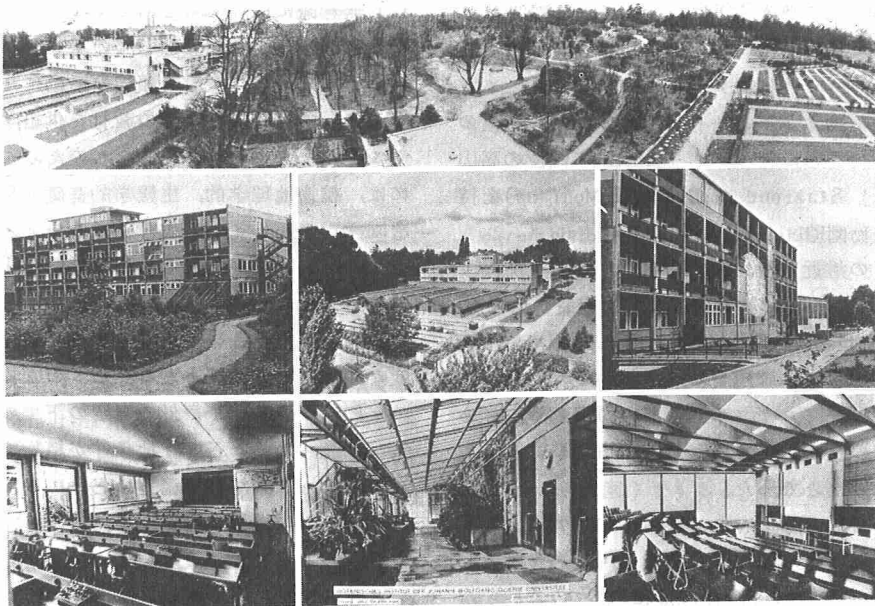
などにもそれぞれ中規模，標準的な大学植物園がある。オーストリーのWien, Graz, Innsbruck各大学植物園も，とりたてて述べるほどの特長はないが，共通なことは，München, Hamburg, Berlin-Dahlemの，所謂西ドイツの御三家といわれる3大植物



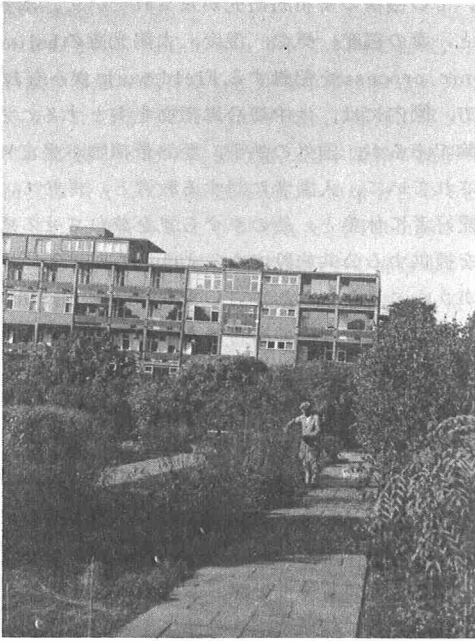
Berlin-Dahlem 植物園の大温室

園，LondonのKew植物園，Parisの国立自然史博物館附属植物園などと同じく，訪れてみて感じられるのは，古い歴史とともに定着した，その園の伝統的な性格から，新しい時代に即応した思いきった近代化への改革を試みることは容易でないという現場職員達の脳みである。歴史ある大学植物園が，将来の，少くとも現に動きつゝある新時代の社会的要請

に対応した改革を，理念的には目下の課題としている様子がかゞえるが，既存の規模の大きいことゝ，永き伝統と因習に縛られた悩みもあって，現実の面に現れた動きは遅々としているという印象をうけた。こゝでは，あえて，比較的新しい大学植物園の例として，FrankfurtのGoethe大学の植物園をとりあげてみたい。西ドイツは，東ドイツとともに，大学植物園が最も整備された国の一つといえるだろう。Frankfurt市には，市立の植物園であるPalmengartenと，Goethe大学植物園とが，相互の機能を重複させないように，併設されている。両者とも，市の中心から西北方に当る街はずれにあり，後者は南，東および東北側は広大なGruneburg公園と境し，西および南西側は，前記のPalmengartenに接する。現在の地に園の設立が始められたのは，1937～39年で，第二次大戦と，終戦後の数年間，工事が中断され，1949年に再び着工し，約10年をかけて完成した。1969年訪れた時の園長Prof.Egleは，植物生長生理学，光合成の専門家であり，田宮博先生(本学の前応微研所長)のことをよく噂しておられた。Egle教授は，この園の設立の頃，長靴をはいて，造園工事にもたずさわったと聞いた。以来10年間，園の経営に従事され，植物園職員の信望も絶大で，昨年1975年に，多くの人々に惜しまれて亡くなられた。この植物園の前身は，現地から程遠くない，大学本部の構内



上段はGoethe大学の植物園，全望。中，下段は，それぞれ教室，研究室の建物外観，および講義室，実験温室，実習室の内部を示す。



Goethe 大学植物園内の Fachbereich Biologie の建物

にあった。その創立者は有名な Joh. Christian Senkenberg で、その名を記念した Senkenberg Museum は、生物学、主として脊椎動物学研究の中心となっている。植物園の変遷の歴史については、Egle 教授の著書にもみられ、周知の "Dichtung und Wahrheit" にみられるように、詩人ゲーテの意見が植物学の面でも反映し、刺激となったことが知られる。当地の人、Goethe 大学の職員は、150 年後の今日、実験温室や、Klimakammer の実現を以て、これに近代的な意識で応えようと考えている。植物園は、科学教育と研究に貢献する使命を持つという創立者の主旨は、キャンパスの移転や管理者の交代を通じて、その精神が受け継がれ、機能に応じて隣接する市立の Palmengarten (この敷地も、もと Goethe 家の寄附に始ると聞く) ともお互いに相補い、無益の重複や競合がないように配慮されて運営されている。私も滞在中、Egle 教授の要請により、植物学教室の学生の Praktikum にタッチした限りでは、Goethe 大学植物園と、Palmengarten とを目的により有機的に利用できるのには感心させられた。人事交流も、ある程度は両者間に行なわれている。園内には、植物教室、動物教室のほか微生物学、人類学の教室もあり、動、植、人間という対象によっての区別と、併せて生物学的問題の提起によって、各分野の有機的な総合を、一つのキャンパス内で、成

し遂げようという方向で、共同研究を促進し、生物学、遺伝学、動物行動心理学 (ミツバチの生態、コウモリの行動生理など)、人類学、生化学、生物物理学、物理化学の境界領域の研究分野の発展をめざすということが、うたわれていた。キャンパスの一角に栽培温室に接し、職員、外来研究者のための宿泊室、食堂と、特に、園の技術職員の厚生施設が、小規模ながらしつらえられてあり、この Gastzimmer に筆者も再度、お世話になった。敷地の大部分を占める苑地は、Soziologie (生態学) 区域で、そのなかに湿性および乾性草原 (Wiese)、湿原 (Moor) 荒地草原 (Düne)、ヒース (Steppenheide)、高山性草原 (Alpinum) および、幾つかのタイプのヨーロッパ各地方の混雑林のモデル地区などが設けられ、園のほぼ中央には人工的な富栄養池 (oligotroph な Teich) があり、これも 3~4 年ごとに浚渫工事で改新される。小規模の薬用、園芸用などの標本園のほか、ブラシカの類や、トマト、あるいは穀類など農産栽培植物の発達史を示す展示標本園、接木雑種の実例 (Haberlandt の Crataego-mespilus など) もみられ、教育的にもかなり完備されている。

Köln 市立植物園では、(Frankfurt の Palmengarten に立派な温室があるので、Goethe 大学の植物園では重複を避けていたのと同じように) Köln 大学の研究資料植物が、みごとに育生管理されている例をみた。1974 年東京で、日本植生学会の国際シンポジウムが開かれた際に来日した、Köln 大学の Jensen 教授が、日本から採集して持ちかえられた、シラネヤオイ、Ranzania (トガクシヨウマ) などの貴重な生品が、開花結実し、研究資料として、血清反応で植物成分の比較から系統類縁関係を追求している彼の研究室で用いられているのを、1975 年に Jensen 教授を訪ねた際にみせられた。同時に、彼の友人でもある、Köln 市立植物園の Dr. Koch 氏の努力によるものであることを、国立大学と市立植物園との関係の一例として興味深く聞いた。

また、ドイツ国内では、あるいはヨーロッパで一般に数多い園が、お互いに努めて同じタイプの園になることを避け、できるだけ特色をだすようにしている。(これは、真似をすることを恥とする自負心によるのであろうか。) 西ドイツだけではないが、園のすみずみまで神経のゆきといた管理がなされている大学植物園の長は、すべての例で、10 年前後のキャリアをもつ園長のもとに管理運営されている。前述 Egle 教授のほか、Kopenhagen 大学の植物園の

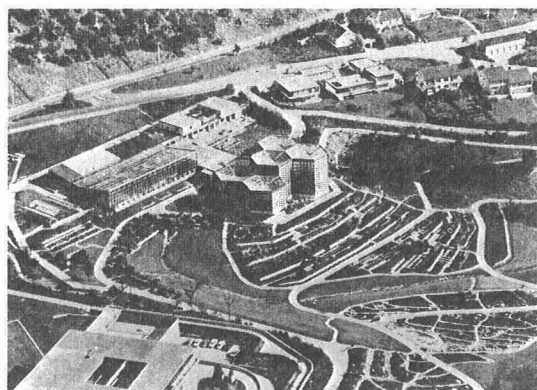
Prof. Olsen, Techn. Mniv. 植物園の Prof. Aach
ほか、多くの例をみる。逆に短期間で、その長が、
たらい廻しに交代するところでは、長期的展望がえ
られず、職員の意欲はあっても、コンセントレイト
されず、徒らにダイバースしているという現象が、
いく箇所かの例でみられた。



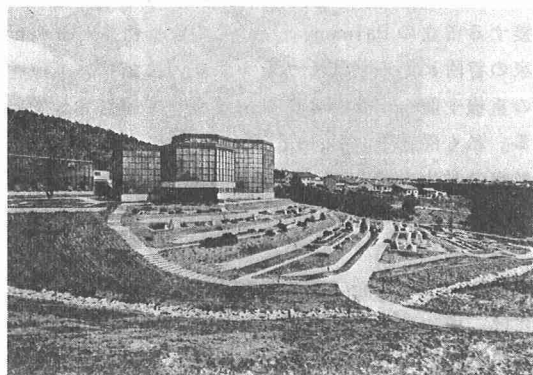
地中海に臨む Costa Brava (スペイン) の Mar i
Murtra 植物園

スペインの地中海沿岸の Costa Brava に Mar i
Murtra 植物園という、いつ風変わった、地中海岸一帯
の生物学的研究所を兼ねた園 (el Jardin Botanico,
Fundacion Carlos Faust, Mar i Murtra) がある。園
の名は sea and myrtus を意味し myrtus はヴィーナ
スの神木で、地中海沿岸の指標植物の一つでもある。
その創設者が、ドイツ Hessen 州出身の Dr. Karlos
Faust で、彼が若き日に、天啓により南方の地に、
植物研究の新天地を開拓する使命を感じ、スペイン
国内でも特異なカタロニア文化圏にある Costa Bra
va の Blanes という小さな漁村にやって来て、当時
ブドウ島であった村はずれの高台に、最初の跡を入
れたのが、この植物園の発端であった。1874年生れ
の彼が少年時代に Frankfurt a. Main で学んだこと
など、やゝ伝説的ともいえる、その小伝を植物学に
関する雑誌で読んだ筆者は、Frankfurt 滞在中の
1970年の5月、Blanes に Mar i Murtra 植物園を訪
れた。門をはいってすぐ正面に Faust の胸像があり、
彼は、この地に亡する迄、独自のプランによって園
の設営に従事したこと、彼の死後、園の管理はスペ
イン人の同志財団法人によって行なわれ、前記の研
究施設に移行したことなどを知った。この施設は、
外来研究者に対して公開されている。訪れたとき、
丁度、地中海沿岸の指標植物の葉の気孔開閉に就い

て、その機構の解析的研究がなされていて、蒸散作
用と、葉の温度、気温、湿度、太陽光線の helioch
ronic process を記録する Field work がみられた。
一方、園内には、地中海沿岸植物を主とすることは
勿論であるが、国外の熱帯、亜熱帯植物が豊富に植
栽されていて、入園者に対する教育と、併せて、自
然愛好者に休養と、魂のやすらぎを兼ねさせる雰
囲気を提供する公共施設であるように心がけている様
子がうかがえた。これに対して、Barcelona 植物園
は、同市の港の背後の高台にある、標準的な古い植
物園で、コロンブスの柱像を眼下にみおろす、台地の
斜面が苑地となっている。丁度5月の季節でもあつ
たため、マツバギク類 (Aizoaceae ツルナ科 Mesem
brianthemum) の綺麗な花が、標本園花壇に咲きみ
だれていた。Barcelona 大学には、植物教室のすぐ
傍に、さすがに植民地関係の学部研究室、教室があ
って、この国の特殊性を感じさせられ、イギリスや、
オランダの嘗ての植物園にみるように、植物園の来
歴の一つの原型が、植民地植物の研究にあったこと



Tübingen 大学の植物園と生物学関係の研究室の建物。
写真中央に調節栽培温室 Tropicarium がみられる。



Tübingen 大学の植物園, Tropicarium とその下
の斜面に標本園がみられる

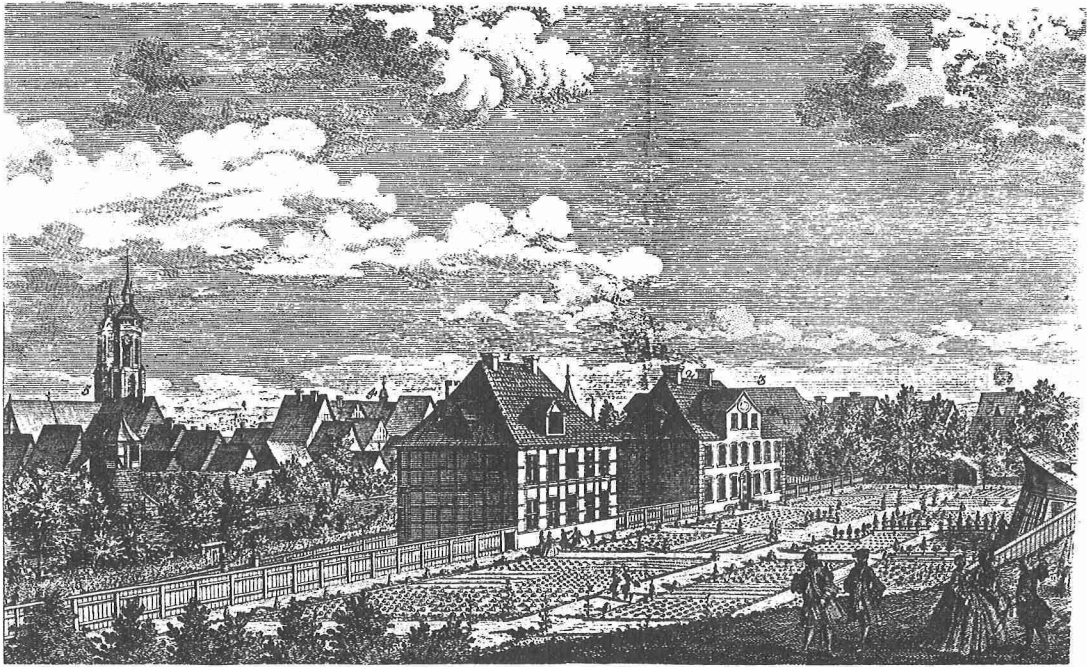
を思いしらされた。

いまひとつ、関心をもってみてきたことは、大学植物園の移転の例である。かなり多くの古い大学が狭くなった旧市内のキャンパスを、郊外に移すに当って、広義の生物学関係乃至、理学関係の諸研究室の研究環境として、植物園の広い地域を占める設営がなされた例をみることができた。(Tübingen 大学の生物学科、写真参照)現に進行中の場合もかなりある。(Göttingen大学)この問題は、日本でも将来の、然も近き将来の課題と思われる。

国外の植物園を訪れて、われわれが思っていたより、Hortus Botanicus Koishikawaensis Universitatis Tokioensis (東大小石川植物園)の名が多くの人びとに知られているのに驚く。5万坪の土地を昔の人は、もっと有効に使う知恵があったように見える。甘藷先生(青木昆陽)の記念碑、小堀遠州設計の日本庭園、厚生施設としての養生所跡、精子発見のイチョウを見るにつけても、さらに近くは、日本の植物生理学、生化学発祥の地である、柴田桂太先生記念室などを、今日のわれわれは、単なるモニュメントとして眺めるだけに終ってはなるまい。

最後に、スカンジナビア半島のいくつかの古い大学植物園-Uppsala, Göteborg, Lund, Copenhagen, Oslo, Bergenなどを訪れたあと、SwedenのHelsingborg自然植物園をみた感想を述べたい。デンマークの北の端Helsingorから、スエーデンのそれによく似た名の街Helsingborgへは、両国の間を船で連絡する最短距離である。この古い小さな、みなと街は、船付場から斜面でゆるやかに高台につづく、よく整備された緑地、墓地や公園にもゆとりの感じられる閑静な雰囲気をもつ。その街はずれに、自然植物園(Botaniska Trädgården inom Fredriksdal Friluftsmuseum, Helsingborg = The Botanical Garden within the open air museum of Fredriksdal, Helsingborg)がある。園は1918年、市のMuseumが個人の荘園を、その館とともに寄附を受けたときに始る。寄贈者の証書に、所在地の一部が、植物園を建設するために使われること、とあった。園内の植樹などが活発に促進されはじめたのは、1936年頃で、Lund大学のProf. Nils Sylvéénと、市のMuseumのDr. H. Vallinが、園の長期的展望をふまえた構想と、詳細な植栽区分、造園設計の立案にあたった。現在でも、Lund大学の植物学研究室から資料の供給、調達など有効かつ適確な指導を受け、お互いに交流をはかっている、という。Skåne

地方の自然植生の一部を園内にとりこんで、その植生タイプをProto-typeのモデルとしたもの、逆に経済的に重要な栽培作物を雑草植生といっしょに栽培し、除草剤を全く使用しない(嘗て一度も使用したことのない)地区などを設ける創意工夫がみられた。所謂、雑草が耕作地から除草剤で急速に消えていく今日、本来のBiotope(幾つかのplant communityからなるplant association)を保存する意図がそこにある。現在、園のスタッフとして専門的な研修を経たSkåne地方のFloraの研究者や、植物生態学を修めた技術者が任命されるシステムになっていて、比較的短期間のあいだに約900種の植物を園に導入することができたと聞く。内容からみても、Skåne地方で珍しい種や絶滅のおそれのあるものを含むばかりでなく、科学的価値の高い当地方特有のBiotopeの要素をも含んでいて、種類乃至communityの保存に貢献するという意義がある。さらにcommunityの成立と発達の時間的経過を比較研究するための準備も進行中で、このような、自然界の摂理の基礎的研究の地道な努力が、自然の保護管理にも通ずることと思われた。現園長のDr. Merkerのお宅に一晩泊めて頂いて、雑談のうちに、うかがったことは、このような植物園の今後新しい時代に対応しての価値を、社会的な観点からいえば、できるだけ広く世間の諸階層の人びとに認められるようにすること—つまり、将来の植物学者、生物学者、教師や学生には勿論のこと、そればかりでなく、一般の民衆で自然に関心をもち、そこから学ぼうとするひと、さらには素朴で田園詩的な欲求をもつすべての人間に欠くことのできないコーナーとしての存在価値を認めさせることであろう、と。Helsingborg植物園では、自然を総合的にみるという主旨から、こゝで行なわれている教育のうちに、地質、動物、自然地理学の基礎的なカリキュラムを含めているばかりでなく、素朴ながら、地学分野の資料も、ある程度整備されつゝある。以上で、厳密な意味では、大学の植物園以外のものにふれよが、帰国後、わたくしは、大学植物園に限定して、その将来像と展望について、各植物乃至生物学研究室にアンケートをとり、これを参考に、ひるがえって、本学部の植物園をかえりみてみたが、今後の課題が如何に重いかを痛感した。植物園というのは、基礎理学(数学を含めての)勉強のため、“知慧のいこい(憩い)の樹蔭”を供する森であるという、イギリスの詩人のことばにふさわしい所でなければならない。



ゲッティングゲン(月沈原?)市は、古い大学街で、旧市街には、ガウスの銅像などがみられる。
上図は18世紀のGöttingen大学の植物園と、その研究室の建物。現在は、旧市街内のこの場所から、郊外に移転が進行中。

ハイゼンベルク教授を悼む

西 島 和 彦 (物理)

二月初めに新聞紙上でハイゼンベルク教授の訃に接した。一月に肺癌で重態であるということを知ったばかりであった。奇しくも量子力学建設後丁度半世紀目であった。云うまでもなく、ハイゼンベルクは、量子力学の建設、特に行列力学の創始者として、或いは不確定性原理の発見者として、及び其の他の多くの重要な研究で知られる今世紀最高の物理学者の一人である。戦前は彼の研究室は理論物理学のメッカであり、多くの優秀な物理学者が集った。日本からも菊地・藤岡・朝永等の諸先生方がハイゼンベルクの許で研究をされ、日本にも知己が多かった。

私がハイゼンベルク教授に初めてお目にかかったのは今から丁度二十年程前のことである。朝永先生

を通じてゲッティングゲンにあるハイゼンベルクの研究所へ来ないかとの話があり、昭和三十一年一月にゲッティングゲンのマックス・プランク物理学研究所へ赴いた。私が着いた頃には、ハイゼンベルクはスコットランドに講演旅行中でゲッティングゲンには居られず、お目にかかったのは二月になってからであった。その留守中に、研究所に居る若いドイツ人から、色々と彼に関する予備知識を与えられた。

当時のドイツは、戦争の痛手から完全に回復しておらず、到る所で戦争の痕跡が見られた。例えば、色々の役所に行くと、そこで働いている人は殆んど例外なく戦傷者ばかりであった。どうやら公共の役所では戦傷者を優先的に雇っていたようである。ハ

イゼンベルク個人も戦争ではかなり精神的痛手をこうむったらしい。初めてお目にかかった時の印象は、伝説的な俊英というよりはむしろ好々爺という感じであった。色々と昔の逸話で聞いていた鋭さは全く感じさせず、当時五十代の半ばであった筈だが、ずっと年をとっているような感じを与えた。ハイゼンベルク自身の環境は第二次世界大戦を境として完全に変わってしまったようである。

その第一の原因は、アメリカからの度重なる招聘を断って最後までナチスドイツに止ったこと、及びアメリカに原爆を創らせることになったドイツでの原爆研究に加ったということであろう。その結果として、ハイゼンベルクはユダヤ系の物理学者の憎しみの対象となってしまったようである。

このようなデリケートな問題の真相は、ドイツに日の浅い外国人等には判らないが、その後研究所のお茶の時間等に、時々ハイゼンベルクは若い者を集めて昔を回想するという形式で戦争中の事を話して聞かせた。

自分はドイツ人であるからドイツのためにドイツに最後まで留っていた。しかしドイツに留ってもナチスには協力しなかった。当時ユダヤ人の発見したことを一切排除して建設したドイツ物理学というものがあった。この主唱者はシュタルク（シュタルク効果の発見でノーベル賞受賞）等のナチス物理学者で、アインシュタインの発見した相対論を排除した狂気の物理学とも云うべきものを信仰していた。ハイゼンベルクは良心的な物理学者として、このナチス物理学と随分烈しくやり合っただけらしい。しかし流石のナチスもこの高名な物理学者のことは処理し兼ねたようである。

原爆に関しては、彼は到底戦争に間に合うとは思っていなかった。勿論当時のドイツの国力を考えての上であったであろう。しかし彼はドイツの物理学者を戦場に送らないで済むように、或る程度の研究続行を進言していたらしい。しかし勿論実際には作ろうとはしなかったし、また作ることは到底出来なかったらしい。彼によればこんなものを本気で作ろうと努力をすることは狂気の沙汰であり、本当に作ってしまったオープンハイマーのことを批判していた。そしてその時は彼自身も色々和中性子を使った実験をやり、大変楽しかったと語っていた。

本心はともあれ、表面的にはナチスドイツに協力した形になり、そのために戦後随分苦勞されたらしい。その結果として、戦前は評判とした若手の物理

学者だったのが、戦後はすっかりと老け込んでしまったということを知った。私がゲッチンゲンを去って次に行った所は、アメリカのブルックヘヴン国立研究所であった。ここの物理の主任は、スピンの発見で有名なカウスミットであった。彼は私がハイゼンベルクの所から来たと言うと馬鹿にハイゼンベルクの悪口を言うので何故だか判らなかつた。後に私は或る本を読んでやっとなんか判ったのだが、カウスミットにはオランダ系のユダヤ人で、彼のオランダに残っていた家族はナチスのために皆殺しにされてしまった。そして戦争末期に、ドイツの原爆研究の秘密をソ連に奪われるのを防ぐためにハイゼンベルク等を捕えるためのアルゾス機関が組織された時に、カウスミットはその責任者としてドイツに赴き、ハイゼンベルクを逮捕したのだということであった。逮捕されたハイゼンベルク等のドイツ人の物理学者達は、イギリスの古城に半年間幽閉されていたという。

この幽閉時代のことは、ハイゼンベルクのお茶の時間の話題として屢々登場した。家族との連絡が断たれていたということを除いては、大変優遇されていたらしい。

或る時ハイゼンベルクが監視のイギリス将校に、自分が誰であるか知っているかと聞くと、ベタン元師だろうと答えたという話は彼の十八番であった。

さてこの頃マックス・プランク研究所をゲッチンゲンからミュンヘンに移すという話が具体化していた。日本でいえば東京教育大学を筑波に移すというような話であるが、この場合は逆にゲッチンゲンのような田舎町では大規模の実験設備が置き難いので、大都會のミュンヘンに移ろうという話であった。南独の出身のハイゼンベルクはこの話に大いに乗り気で、毎週ミュンヘンに出かけて行った。研究所にとっても貧乏なニーダー・サクセンから富有なバイエルンに移ることは財政的にも得になることであった。政府から予算が認められると彼の興味はもっぱら研究所のためにどんな美術品を買うかということであった。それは政府の予算の何パーセントかは、研究所の装飾のための美術品を買わなければならないという規則のためであった。日本では考えられないことだが、このパーセンテージはかなり高率であった。お茶の席に、彼はこんなものを買いたいということを楽しそうに語っていた。

またこの頃のハイゼンベルクは、毎日研究所には朝九時から十一時まで出て、午後は出て来なかつた。そして朝の二時間に事務をとったり、色々な人を呼

び出して物理の議論をするのを常としていた。私も何時呼び出されるかは判らないが、毎週少くとも一回は呼び出されるので、毎日九時までに行った。そして呼び出しが終ると、その後の二三日はゆっくりと出掛けることにしていた。

そういう時に限って研究所へ行く途中の道で、研究所から家へ帰る途中のハイゼンベルクに出会ってあわてたりしたものである。或る時などは、ハイゼンベルクが呼び出した五人が皆まだ寝ていて研究所に来ていないことがあって、とうとう研究所に一番近くに住んでいた人が電話で起こされて呼び出されたことがあった。私も寝坊をして出て来てその話を聞き、その五人の中に私が含まれていなかったことを告げられほっとしたことがある。

理論物理の若い連中の寝坊にはハイゼンベルクも手を焼いていたらしい。行った年の秋、ハイゼンベルクの誕生日に、理論家が全部朝早く集り、彼の部屋にお祝を述べに行った。勿論彼は喜んだが、理論家が全部揃ってこんなに朝早く起きたことにびっくりさせられたと挨拶をした。

ハイゼンベルクが生涯を通じて最も尊敬していた友人はパウリであった。研究上のことで何か行きづまると、直ぐにパウリの所へ出掛けて行った。丁度その頃、ハイゼンベルクは彼の晩年を捧げた非線形

の場の理論を始めたところであった。パウリはこの理論には反対であったが、丁度この頃の一時期ハイゼンベルク理論に興味を持ち、二人で一緒に仕事をしていった。パウリはハイゼンベルクにとっては最も辛辣な批判者であったので、学会などでハイゼンベルクが話をする時には、まずパウリの席の前まで行き、彼の顔だけを注視しながら話を進めるのであった。

パウリは首を縦に振ったり、横に振ったりして聞いていた。間もなくパウリはアメリカに行き、ニューヨークの物理学会年会の時に、ハイゼンベルクとの仕事の話をした。しかしながらこの時には既にパウリは批判的になっていた。その後短期間アメリカに滞在したパウリはスイスに戻って間もなく急死した。

その後研究所はミュンヘンに移り、最後にお目にかかったのは五年前、彼の七十才を記念して開かれたシンポジウムの時であった。その後間もなく隠退され、回想録を書かれていたと聞く。昨年ミュンヘンに寄った時には既に病を得て静養中であるということであった。

ドイツ科学の栄光を象徴するこの世紀の巨人の冥福を祈って筆を措く。

女性 の 曲 り 角

中 村 圭 子 (化学・生化・OB)

所用で久しぶりに本郷のキャンパスを訪れ、帰り路に友達の研究室へちょっと顔を出してみた。相変わらず、薬の匂いがしみこんであちこちに孔のあいた実験着で動きまわっていた彼は、同じ部屋で実験をしていた女子学生を紹介してくれたあと、最近は、昔と違って東大の女子学生もかわいくなったでしょう。」とつけ加えた。昔の方に属している人に向けて「昔と違って」もないものだといさゝか憤慨しながらも、やはり客観的事実は認めざるを得ない。

十数年前一と文学的(?)表現をしておくが一には、女の子が東大の理科系へ入学するということがそもそも社会一般の通念からみて普通のこととはいえなかった。親は、そんな所へ入るとお嫁に行けなくなると反対し、近所からは変ったお嬢さんとみられた。そんな雰囲気の中で、やはり東大へ入って勉強した

いと思えば、キュッと口を結んで頑張る必要があった。自ずと顔もきつくなつたに違いない。最近では事情はまったく変わってしまい、噂によればおむこさん探しの場として入学してくる人もいるとか、そうなればニコニコと和やかな顔の方が向いていることになる。

たゞ、私がここで云いたいことは、大学へ入る所あたりまでは、あまり抵抗がなくなつたけれど、その先本当に自分がやりたいことをやって行こうと思うならニコニコ顔ばかりはしていられないということである。真剣に、しかもかなり早い時期に自分の生き方をきめることが必要だと思う。

誰が云った言葉かは忘れてしまったが、「40を過ぎたら、人間は自分の顔に責任を持たなければならない。」という有名な発言がある。確かに適切な言

業だと思いが、私はこれは男性の発言であり、人間と云っても男性の立場を云っている言葉だと思う。

男の子の場合、いっしょうけんめい受験勉強してなるべく評判の高い学校へ入り、無事卒業したら就職、という一応のおきまりの道ができています。就職先が官庁であるか民間会社であるか、または学校の先生になるかというような選択はあったとしても、所詮きまった組織の中へ入り、その中で行動することになる。自由業などという、いかにも自由度の高そうな名前の職業にだって一応の仕組みがきまっています。そんな中で、組織とはどんなものかを学んでいくのが男の人にとっては大切な仕事のようにある。しばらくすると、それまでにどんな仕事ができただかが自分には他人にも明らかに、どんな方面に向いているか、これから先どんなことがやれるかがだいたい決まってくる。こうなると、自分の責任で仕事をするができるようになり、本当の意味での自分の生き方をきめなければならない。これがほぼ40才位、したがって、40才になったら自分の顔に責任を持つということになるのだと思う。

ところで、女性の場合は少し事情が異なる。先ほども書いたように、最近では大学へ入るところまでは、あまり深く考えずとも進めるようになってきた。けれども、その先の道にはまだ男性と同じようなルールは敷かれていない。

これは、私のたいへんに個人的な考えだが、女性の場合にはやはり、家庭を創りあげてを自分の生活の中心に置くか、社会の中で働くことを中心に考えるかの選択をはっきりする必要があると思う。これは、女性差別のように聞えるかもしれないが、そうではない。これからの社会のありかたを考える時、社会の基本単位としての家庭の重要性はいくら強調してもすぎることはないはずである。だから、暮らしを創造していくという作業は社会全体の進ん

でいく方向に関り合う意義のある仕事になる。“三食昼寝つき”などではなく、暮らしを創り上げていくこと、それを基盤にして社会と結びついていくことの大切さが、今はあまりにも無視されている。そして生活の創造に必要な発想という点では女性の方が男性より優れていそうな気がする。生活のあり方にかなりの重点がおかれるようになるこれからの世の中では、女性の活躍の方法の一つに、家庭を基盤にしたものが大きく出てくるはずだと思う。したがって、積極的な意味で、二つの選択を考えることができると思う。二つの選択といっても必ずしもまったく職業をもたないか家庭を持たないかというはっきりしたものである必要はない。いわゆる仕事と家庭の両立ということはある程度得る。ただ、いざという時、一体自分はなにを最優先させるかということを中心にはっきりさせておくことだと思う。実をいうと私自身、たまたま相手がみつかった時に結婚し、運よくみつかった職業につきという生き方をしてきてしまい、かなり周囲に迷惑をかけたと反省している。そう思っただけを見まわすと、家庭と仕事についての計画を早くからきちんと立ててきた女性が、生活面でも仕事の上でも成功していることに気づく。

いずれにしても、その選択は20才位の半ばにする必要があるように思う。というのも子供を産み、育てるという仕事をするのであれば、これは、社会的にみても、生物学的見地からも20才台半ばから30才台前半に行なうのが望ましいからである。

したがって女性の場合、自分の顔、すなわち自分の生き方についての責任は40才ではなく25才くらいから持たなくてはならない。“25才は女性の曲り角”というのは化粧品会社の広告だが、真実をいっている。

“名誉教授の御近況”

編集部註：以下の名誉教授の御近況は、2月末日〆切りで、葉書回答によりおよせ頂いたものの全文です。現在、理学部には47名の名誉教授が居られ、そのうち35名の先生方から御返事を頂きました。尚、森野先生は、本号に御寄稿頂いておりますので、それを以て元気であるという近況報告にしたいということであります。

又、高官先生については、学生委員として苦楽を共にされた飯田先生が思い出をおよせ下さいました。御協力頂いた諸先生に編集部として厚く御礼申し上げると共に、名誉教授

諸先生全員の今後の御健勝と、私共理学部後輩への御指導をよろしく願ひいたします。

坪井 誠太郎 (地質)

全く平凡に暮しております。

学士院、地学協会、無機材研に、合わせて月に数回定例的に出かける外は、かくべつの公用はありません。しかし、前日からやりかけになっている仕事があって、それを進めるのに、自分勝手に自分をいそがしくさせています。

近頃、学術の進歩がすさまじく、私の専門分野でも、新しいことが次から次と現われてくるので、「あれよ、あれよ」と喜しい悲鳴をあげています。

たいへんありがたいことは、大学の教室はじめ諸研究機関に出入りしたり、学会での学術談話会や討論会などに時折出席したりして、新風に浴する機会に恵まれていることです。これは、私にとって何よりの保健剤であり、生活を楽しくさせる要素であります。それから、レクリエーションの第一は、旅行して自然に接することです。

なお、最近私は、同学諸氏の協力を得て作成した「斜長石光学図表」(和英両文)の出版計画を進めています。

左右田 徳郎 (化学)

世間では60才以上を老人ということになっているようだが、60台でも、70台でも一括してしまう分類には少々抵抗を感じる。30台と50台とを比べるのは大分様子がちがうと思う。若者と老人とを区別することは男と女を区別するように明らかにはできないが、ともかくそんなに難かしくはない。だが老人を分類するとなると仲々難しい。個体差が大きくて80台でも世の中で盛んに活動するものもあるし、60台でも委びているものもある。しかし共通して言えることは、老人の生活力は次第に衰退してゆくことであろう。そしてその衰退速度が年と共に加速度的大きくなるというのが私自身の感じである。

私の場合、60台では老眼鏡で読める本が80台の今では虫めがねを併用しなければならなくなった。だから手も疲れる。読むことが面倒になる。(広報は読みます。)耳は片耳だが以前はどうやら間に合わせることが出来たが、今は聞きまちがえなどで内容がわからなくなることも多く、ことに大勢の集合などでは著しい。それで会に出るのが嫌になってきた。

身体の方は衰退が軽く、買物の荷物持位には使われます。これが私の現況です。

以上、つまらない勝手なことを並べて、「広報」には不向なことばかりですみません。どうぞ御遠慮なく役にして下さい。

小倉 謙 (植物)

私は昨年八十路の坂を越え、耳や眼など大分弱りましたが、一応健康に恵まれ、定まった勤務もなく、昨今大分溜った文献などの整理や取纏めなどに努めており、時折東大にもお邪魔しております。

余技としての切手集めも続けており、時折展覧会などのお手伝いをしております。

本田 正次 (植物)

朝日百科の「世界の植物」、シーボルトの「フロラ・ジャポニカ」複製本、それぞれその一部を担当して目下執筆中です。日本植物友の会、植物愛好会その他の植物団体も月一回程度に指導しています。自然保護関係、文化財関係の仕事も活発にやっています。その他関係団体が多くて困っているくらいです。月に二回程度は病院に通って健康診断も欠かしたことはありません。句会も一月までは月三回でしたが、二月からは二回となりました。二十五年の句歴ですが駄句ばかりです。

萩原 雄祐 (天文)

前世紀末以来出版されなかった天体力学の膨大な文献の集成を老人の仕事として一九六一年以来取り組んでいます。前の二巻はやつとのことでアメリカで出版されましたが出版所の経済不振のため、やめられて、今は文部省の補助で日本で続巻を出しています。日本で英文を組むので、校正が大変で、その上、こちらの英語の力が足りないために、苦勞しています。今その最後の第五巻を校正中です。書いてみて英語の力が足りないことをつくづく感じました。しかし内容としてもこの本はひどくむづかしいので、ここ百年間に世界の学者がやった研究は大したものです。と共にこれを勉強するものにとってはその美しさに恍惚としています。同好の人をつのりたいも

のです。

木村 健二郎 (化学)

私は1956年に東大を退任しましたから、本年7月には退任後満20年となります。また、5月には満80歳になります。

家にもっていることの多い近頃ですが、専門の学術雑誌に目を通すのと、俳句・連句をつくるのを日課とし、また楽しみとしています。5月にはこれまでにたまった俳句・連句・随筆からいくつかを選び、出版する予定です。

水島 三一郎 (化学)

昨年暮に頂いた東大広報(多分三〇四号)に「私はその人柄のうちにくらか老人的なものをもっている青年をこのましく思う。同じような青年的なものをいくらかもっている老人をこのましく思う」という意味のことをどなたかが、かかれていました(失礼ながらお名前を忘れしました)。この後の方の例として最近なくなったトインビーをあげることができるのではないのでしょうか。彼は専門史家からさまざまな批判を受けながら八十代の半まで青年研究者のように、たえず自分の考えを発展させ、多くの異なる分野で働くひとびとに、彼の説を傾聴させたからです。と書いたのでは御注文の寸言になりませんか?

多田 文男 (地理)

東京大学をやめてから、法政大学地理学科で教鞭をとって居りましたこと五年。その後駒沢大学に移って十一年、此間大学院で自然地理学を教えて居ります。近頃若い方々の研究が進んで、その研究成果を追跡するだけで、骨が折れます。

足の弱らないうちにと考えて昨夏は下北半島、尾瀬ヶ原、乗鞍岳等の踏査をして来ました。

和田 文吾 (植物)

近況：停年退職後は国際細胞学雑誌キトログニアの編集に専念しています(広報6巻8号参照)。

研究：卒論以来取り組んでいる有糸分裂の機構について、高等下等を問わず動植物細胞の核分裂は共

通な原理のもとに一元的な説明できることを今年のキトログニアに発表しました。

小林 貞一 (地質)

足が不如意で山歩きを断念した私は、平素は内外から集まった標本に秘められた自然史を読みとることに専念しているのですが、今月は例外でした。退官以来の共同研究会の会合で両三日を費したほかは、日本の古生物と地学の歴史についての学会協会の仕事で明け暮れました。それにしても、50才で隠居して、暦学を修め、全国行脚17年、74才で永眠して、歿後3年にして門人の手で、彼の有名な伊能図が出来上ったという逸事は、昨今の私にとって感銘深いものがあります。

山内 恭彦 (物理)



山内 恭彦



山内 恭彦



[註：先生御自作の篆刻です。説明も御自筆。左下は御名前]

坪井 忠二 (地物)

昭和三八年に大学をやめてから、五年間国立国会図書館に勤め、四三年からは、語学教育振興会というところのがんばっています。文芸的ではなく、ざりとてチーチーパッパでない英語、つまりあたりまえのことをあたりまえに正しくいう英語の教育を目指しています。一年に数回、二週間程度のかんづめ合宿をやります。対象は大学生以上です。

学問の方は操業短縮でだいぶ気楽になりましたが、それでも「地球物理学特論」という大きなものをボツボツ書いてます。

茅 誠 司 (物理)

最近牡丹が好きになりました。まだ株数は少ないですが、一年にほんの僅かの期間美しい花を咲かす点が気に入りました。株数を二十株位にしたいと思って、植木屋さんにいくと牡丹ばかり探しています。

竹 脇 潔 (動物)

六年前、思いもかけず川崎医科大学(現在倉敷市、当時は岡山県都窪郡庄村)の開設と同時に赴任し、その時の新入生が育って、この三月卒業するのと同時に、停年(三度目)退職することになりました。六年間、医学教育の実態を目のあたりに見、大学生にもピンからキリまでであることを感心しました。しかしその間、とにも角にも好き放題に実験をつづけることができたのは、学校のおかげと願って感謝しています。五十年来親しんだネズミとはもうお別れですが、人生到る処動物がいるので、これからは度々田舎へでかけて、動物を見つめて暮らしたいと思えます。それも決してきらいではありません。

弥 永 昌 吉 (数学)

学習院大学で火・木・土に行つて講義、セミナーなど(教授会は月に2回火曜にあり、たいてい出ますが、それ以外の委員会などは勘弁してもらっています。)月曜はうちで手紙や原稿を書くのに宛てることが多く、金曜は今でも本郷に行くことが多いです(学会関係の仕事などで)。そのほか、日仏会館の仕事も手伝っていますので、結構忙しく、約束しただけで書けない原稿などたまるばかりで心苦しく思っています。風邪をひいたり、ちょっとした病気にかかることはありますが、お蔭様でますます元気です。

渡 辺 武 男 (地質)

昭和6年地質学科を卒業して北大(13年) 東大(24年) 名大(3年) 秋田大(5年)で45年にわたる大学生活をつづけ間もなく任期を満了して退官するところです。その間多くの若人と共に遇して来たことを心から感謝して居ります。

また山野でハンマーを通して親しくなった世界各地の岩や石にも感謝したい気持です。

大学生生活の末期にあたり、大学問題についても色々と考えさせられる機会が多くありました。

地質学でみかげ石(granites)の成因がむづかしく、“granites and granites”と題して論ずるように、大学についても亦“Universities and universities”と題して考えるべき問題が多いように思えます。何れにしても、大学はよく研究する先生と、よく学ぶ学生の集団であることが最高だと思えます。

さて私は、今後、東京に本拠をもどして生活するつもりです。そしてハンマーと共になるべく山野へ出るつもりで居ります。どうぞよろしく。

小 穴 純 (物理)

8年前から四つ谷の上智大学の物理学科に勤めております。自分の頭が老化して理解力が低下したためでしょうか、講義などでその内容も学生に納得させるためにはどのような説明法を用いるべきかということに興味を持つようになりました。“説明学”をまとめ上げたいというのは私の昔からの望みですが、とりあえず自分の講義原稿を毎年書き改めております。学術書もそうですが、とくに国産の機器類のカタログなどには、説明学の立場から落第点をつけたくなるものが多いようです。

石 田 寿 老 (動物)

今年の一月中旬に高宮篤さんが亡くなった。東大から東邦大学に移ってから五年足らずである。私も同君から招かれて同大学で三年足らずを過し御一緒した。

亡くなる少し前に黄色の花の咲くクロッカス200個を球根で求めてあり、唯今芽が出はじめている。同君を偲ぶよすがとなっている。

藤 田 良 雄 (天文)

退職した年から東海大学に勤めるようになり、週2回神奈川県平塚市の湘南キャンパスに通っている。富士山がよく見える美しいキャンパスで広々とした敷地によく手入れされた芝生と美しい花壇が眼を楽しませてくれる。工学部理学部の学部学生に一般教養科目としての宇宙科学を、又航空宇宙学科の大学院のゼミを一つ担当している。週の他の日は炭素星の分光の勉強を続けている。これについては東大理学

部の天文学教室，東京天文台（特に岡山天体物理観測所），アメリカのヘール天文台にいろいろお世話になっている。又東大の中央図書館の一室を退職以来ずっと使わせていただいて居り，併せて感謝に耐えない。

前川文夫（植物）

毎日元気でやっています。去年はソ連に一月，ニューギニアに三週間ほど行ってきて，勉強になりました。やはり旅行はプラスです。この春には台湾へでかける予定です。

吉田耕作（数学）

拝復

近況をおたづね頂き有難う存じました。

学習院大学に週三日（火水金）勤務いたしております。鎌倉の自宅からバス，電車で乗り継いで目白まで一寸遠いですが，時には返りに帰られる藤井隆先生に車中でお目にかかって，昔話に時間を忘れることがあります。

月に二度位は本郷の教室に伺って，若い方々に色々教えて頂いたり，図書を見せて頂いたりしております。永年の蓄積は大したもの，古いものも，新しいものも，この数学図書室の御蔭で不自由なく，OBの特権(?)を満喫させて頂いて感謝に堪えません。

藤井隆（動物）

毎年，理学部長のお招きで参集し，先輩の諸先生にお目にかかれるのが何よりの楽しみで御座います。小生おかげさまでどうやら健在というところです。

なお，理学部広報一月号所載の拙文「尊い人」はおかしな題で，原文の題は「雑感」でしたので，そのように訂正して下さい。理学部の皆様様の御健勝を祈ります。

安藤鋭郎（生化）

広報編集に御尽力下さる御蔭で，私ども毎回なつかしく拝読いたしております。

本郷を停年後参りましたこの千葉大理学部も，あと云うまにこの四月一日で再度停年と云うことに

なります。五年という年月は一つの研究室を準備し，動き始めさせるのに一杯で，もう五年これからあればひと仕事ができるのにも思われます。停年を重ねるごとににに脱皮をして行くようで，人生の停年までに今度は家庭に入ってじっくり考えしのぶ生活をと云う半面と，二度あったことは三度目の正直でもう一つ力一杯やってみようかと云う他半面とが，目下の頭の中で競い合いです。御機嫌よう。

赤松秀雄（化学）

昨年四月，国立大学共同利用機関として分子科学研究所が岡崎市に設立され，それ以来その創設の勢に追われております。一通りの形が整うまでには，なお二，三年はかかるそうです。御後援下さるよう。

国際化学連合(IUPAC)の東京大会も，ウカウカするうちに，来年にせまりました。「人類福祉のための化学」をテーマとしています。御後援を乞う。さらに先きのこと，長期計画としては「水素エネルギーシステム」の導入のための研究会をつくっております。御期待を乞う。

原寛（植物）

東京大学インド植物調査に関連して，去年は6月まで英国に招かれてヒマラヤの植物の研究を続けました。7月にはレニングラードで開かれた第12回国際植物学会議に出席し，その研究旅行でシベリアのバイカル湖附近やサラン山脈東端の植物を見ることができました。まだしばらくはヒマラヤ植物関係の仕事が残っており，本年前半には，東大と大英植物館の協力でまとめられつつある「ネパール植物誌目録」の第一巻が出版される予定です。

小倉安之（生化）内

去る1月24日病にたおれ，只今入院致して居りますので，折角で御座いますが，御希望に沿いません事，何卒御承知下さいませ。

草々

田中信徳（植物）

現在も引続き帝京大（医；八王子市）で植物を教

えている。校舎は野猿街道沿い、折がありましたら御立寄り下さい。自宅から38キロ、車で往復している。最近の信号のふえ方は年、約10%；昭和46年4月には104であったものが、今は152ヶ所にふえた。つれて所用時間も5割方ふえて1時間半はかかる。それでも国電で揉まれるよりはマシ、風邪につかまることも少ないのを多とする。

地球の生物圏の問題は人口と食糧で21世紀のことが気かりである。今、田中正武氏（京大・農・教授）著「栽培植物の起源」〔昭和50年12月刊行〕を読んでいるが、ジャガイモの発祥地、中央アンデスのアルティプラノ高原（海拔4,000メートル）の探索の話は特に興味深い。食糧と文化の変遷とのかかわり合いは、未来に多くの問題を提起していて面白い。祖先種の自生地に関する研究は広範なもので文明とからむと一層、学際的となる。食糧問題の危機は急速に近づいていることに注目したい。

去る2月15日、母が94才で召天した。不肖の子であった私は今、悲しみのうちに、いろいろの整理に追われている。

木下 治 雄（動物）

停年退官以来、私立埼玉医科大学の進学課程を任されて四年間。この期間は、小生東大入学以来四十数年間のうちで、公私共に一番変化の激しい時期でした。色々な世評の中にある私立医大を少しづつでも正しい方へ向わせるよう気永に努力し、協力を呼びかけて居りますが、屢々深い失望と無力感に襲われる事があります。そんな時のささやかなぐさめは、ほんの僅か乍ら研究の時間が持てる事と、愛すべき若い同僚や学生達が居るとい事です。

宮本 梧 楼（物理）

今春、名誉教授4年生修了見込。現職は日立市にある茨城大学工学部教授。電子工学科に所属している。因に、この大学の本部は水戸市内に、農学部は土浦市近郊にある。西の筑波山麓には学園や研究所がひしめき、東の海辺には原研、動燃などの大物が並ぶ。これらの村と町との間にはさまれた県下の三大市では、生来弱体の茨城大学が圧縮されて一層小さくなり今にもつぶされそう。つぶれないように乏しい個性を強調して、なんとか存在を示そうとするのが悩みである。倒産に傾く三等大学更生法のため

に現代版水戸黄門様の出現を祈る次第。

偕楽園では梅が待っている。

鈴 木 尚（人類）

独自の空港をもちながら羽田から2日かかる日本一遠い島、それが喜界ヶ島です。昨年10月と今年の2月、この島を訪れました。これは僧俊寛と伝えられる遺跡と人骨を調べるためでした。この島は奄美大島の沖合25km。島に着陸すると20分で戻ってしまいます。一日一便は止むえないとして、鹿児島発の一番機だけにしか接続しません。ですから羽田から立つと奄美か鹿児島で一泊しなければなりません。2日かかる理由はここにあります。しかも有視界飛行ですから雨で視界が悪くなると飛行中止、切符はキャンセル。10月に行ったときは丁度、種子島でたしかに大水害のあった時に当りましたので、来る日も来る日も雨。宿の2階から沖をながめては、今日も飛行機は来ないのだろうかと気にしながら望京の念もだしがたく、今様俊寛をふんだんに味わされたことでした。

岩 生 周 一（地質）

この冬は偶然の用事で松本までの旅をしました。久々に車窓に見る八ヶ岳の冬景色はくっきりと澄んで美しく、変化に富んでいて、飽かず眺めては下手なスケッチを楽しみました。大陸の高原の広漠とした風景の好きな私にも、流石、山裾に隠れた人里を懐しむ様な旅情をそそる眺めでした。

唯、私の選んだ特急はこんな景色の中では余りにも機能的で速過ぎて残念でした。眺めの中には写真では見えないものがあるのにそれを奪ってしまうからです。

ふと、現代の物事の流れるにも似たものを感じたのです。

永 田 武（地物）内

12月10日より3月16日まで南極へ出向いて居りますので失礼します。

門 司 正 三（植物）

浪人生活もほぼ1年、晴耕雨読にはほど遠く、さ

りとして小人は閑居すれど不善もなし得ず、ただ、
アツタ ヨウ
明日には毒蛾にならん蛹の夢

今井 功 (物理)

昨年4月、東大を離れて阪大基礎工学部の機械工学科に移ってから、もう間もなく1年になろうとしています。物どころがついて以来神戸に育ち、東大を卒業してすぐ2年半ばかり阪大の理学部で勤務しましたので、ここはいわば古馴染みのところですが、学生時代を入れると約40年の東大生活ですので、いまだに留学生の心境です。ほとんど単身赴任の状態で、これまで週末はだいたい東京で過ごす有様です。新幹線の往復にもなれました。車内の3時間は電話にもテレビにもわずらわされない自由時間としてのんびり楽しんでいます。中途はんばにやり残した仕事、やりたい仕事などのことを考えると、もう一度学生時代から計画的にやり直せばと無理なことを望みたくなります。

小平 邦彦 (数学)

昔私が大学の二年生になったとき、高木貞治先生が定年退官されました。当時の名誉教授の先生方は威厳があって悠然として暮らして居られた様です。私も何とかして悠然たる心境に到達したいものだと思いのですが、どうもうまく行きません。どうしたらよいか御存知の方はこっそりと教えて下さい。

高宮先生の思い出

飯田 修一 (物理)

高宮先生がお亡くなりになったという悲報に接してからもう既に1ヶ月以上になる。私は高宮先生とは二つの意味で接触があった。一つは私の弟子の田崎明君(阪大基礎工学助教授)を介してであって、米国に永住しておられる両親が、田崎明君の日本での親代りとして依頼されたのが高宮先生なのである。今一つは大学紛争を通じてであって、理学部での学生諸君の抗議活動が最も華やかであった時に、丁度高宮先生、秋田先生等と共に理学部学生委員として、学生諸君との交渉に当ることになったのである。不思議なもので今思い出すと苦しかった記憶は薄れて、

嬉しかったことや、高宮先生の御人格に触れて感銘を受けたこと等だけが思い起される。高宮先生が学生諸君を前にして交渉に臨まれるときの意気込みはそれこそ大変なものであって、どんなに永く掛っても説得するという心情に満ち満ちて居られた。その結果交渉は必ず深夜にまで及ぶが、妥結点は常に大変合理的なものであった。高宮先生は大変お酒ずきであって、私が酒も煙草も飲まないというと、「それでは何を楽しみに生きて居られますかね」と問われて参った事がある。理学部と学生諸君のためにほんとうに身を削る努力をされた結果、とうとう病院に入院されることになったのであるが、その際、「一緒に入院しませんか」と真面目に誘われた。私が冗談に、「入院も結構ですが、高宮先生と同室では」とかお答えすると、「ありゃ、あんなことを言って」といたづらっぽうな顔で眺められたことが今更のように眼に浮ぶ。私は心身共見掛けよりは少々丈夫に出来ているようで、その結果時々得をすることがある。高宮先生のお話によると先生は私が弱そうであるからということ、学生委員としての活動中、ずっと私をかばって下さって居たということであって、案外私が参らないということを見出されたとき、先生の身体の方が、言う事を聞かなくなって居られたという次第のようであった。その時の恩情に溢れる、しかし残念そうな高宮先生のお顔は一生忘れない思い出である。

高宮先生と最後にお会いしたのは理学部4号館の廊下の中であって、もう既に退官された高宮先生が、ベレー帽を頭に瓢々として歩いて居られた。突然のこと等でびっくりして御挨拶申し上げた後、私は物理学者として、色々なことは譲れるけれども、こと物理学の真理に関する限りどうしても譲れないといった最近の気持ちをお話すると、大きくうなづかれて居られた。この姿が、私の脳裏に残る高宮先生の最後の姿になろうとは、その時全く想像出来なかった事であった。主義・主張は人それぞれ千差万別であろうが、人間として頼れる人を一生の中に何人か見出すことが出来る人は、幸福と云えるのではなからうか。私は自分の分野の中で、恩師茅誠司先生を初め何人も心から信頼できる先輩を持って居るものと信じているが、高宮先生は他の分野の中で見出した数少ない信頼できる先輩の最たる人である。今ここに高宮先生の思い出を書かねばならないことは何とも言いようのない程残念なことである。

ここに先生の御冥福を心から御祈りする。

渡辺正雄著

「日本人と近代化学—西洋への対応と課題—」(岩波新書, 1976)

清水韶光 (物理)

物理の猪木先生が、あるとき筆者をつかまえて、標題の本を読んでみるようにと薦められた。忙しい事を理由に、再三辞退したが、再三懲悪される。それでとうとう読んだ。ところが、大変面白い。日頃科学の研究に従事しているわれわれの、謂わば精神的風土がどんなものであり、どんな風に形成されて来たのかが語られる。読んでしまつてよく考えると、書名の「日本人」というのは、「われわれ」つまり、理学部で自然科学の研究に没頭しつづけている「われわれ」の事であり、「近代科学」は、その「われわれ」の日常茶飯とする「研究」を意味する。よろしい。「われわれ」は毎日毎日、自然を「探求し研究」している。しかしながら、それなら世界に向けて、自然探求の最前線(少なくともひとつ位)は、ここにこそあるぞと大声で宣言出来るかと、ひそかに自問してみると、今度は些かためらいのような気持が現われる。それは無理もない事だと渡辺先生は喝破される。「近代科学は、誰に対しても、いつでももっていても通用するという性格のものではあるが、それは本来、西洋の世界観の所産である。それも、近代に入ってから突如としてあらわれたというのではなく、古代中世以来の伝承と蓄積をまっけはじめて生み出された。」(傍点筆者) 明治時代に西洋から、招かれてやって来た「教師たち」はこのことをよく知っていたが故に、「(科学の)種をまき、その種から日本で科学の樹がひとりでに生えて大きくなれるようにしようとした」のだが、「日本人」たちは、彼等を「科学の果実を切り売りする人として取扱」って来たのである。そして「科学の…成果をもたらした精神を学ぼうとはしな」かった先人たちのあやまりが、何処かで現在の「われわれ」にまで尾を引いているのである。それは、まず教育に現われ「せつかくの科学教育」が「いたずらに、学生

生徒への知的拷問の材料となり」、また科学技術の取り入れ方のまずさは「(社会的に)いちばんよい人間のところに集中し」て犠牲を強い、とめどない「環境破壊」をもたらした。そして、さらに、現代科学の専門家である「われわれ」に眼を転じてみると、少くとも筆者には、毎日研究に精を出しているにもかかわらず、何か自分が欠落しているように思われてならない。「科学」は「世界観の所産」なのである。別に確たる世界観があつて物理の計算を行っている訳でないにしろ、この「世界観の所産」というのはあくまで原則たることをやめない。見える形にせよ、見えない形にせよ、これは中核にひそんでいるのである。世界観と一口に言うけれども、「宇宙を数学的構造をもったものである」と「強く確信」していたからこそ近代科学が誕生したのであり、その「確信」たるや、「プラトンやピタゴラスに由来する」のだそうだ。これは筆者の臆測にしかすぎないが、中世キリスト教会の宇宙観である天動説にしても、たゞの荒唐無稽な空想を抱いたというだけではなく、数学的な formulation が出来るはずだとの「強い確信」が信奉者の脳裡にあつたのではないか。この「確信」から出る衝動に駆りたてられて、ついにその「数学的構造」は明らかになった。ところが、それはあらかじめ空想していた地球中心ではなく、地球は太陽の廻りを回る平凡な星だということだった。これは教会の激昂を買ったのだが、もしも教会が、天動説をたゞ空想しているだけで「数式で表現しよう」という衝動を持っていなければ、地動説論者にあれほど弾圧を加える必要もなかったのではないか。結局、教会は自ら唱えた宇宙観の「数学的な構造」を明らかにする事に失敗し凋落して行き、今日の科学が全面的に浮び上つて来た。ともあれ、近代科学は、2ケ年以上も執拗に、自然

は数学的ではなく、と思いつけて来た挙句に生まれたのであった。ダーウィンの進化論の与えた衝撃も似たようなものだったらいい。現代のわれわれに、これほどの「確信」があるだろうか。

数年前になるが、ある所で渡辺先生にうかがったところによれば、先生が科学史に本気で取り組もうとなさったのは、日本が戦争に敗けた事が契機だったそうである。当時、科学者としては既に第一線に立っておられたが、日本の科学は西洋のそれに比べ

て、根本的に何か欠落しているのではないかという疑いが急に頭をもたげて来たという事であった。本書の面白さから勝手な妄想ばかり書き散らしたが、明治以来の日本の科学者、山川健次郎、丘浅次郎、モース、進化論が日本でどんな風にとり入れられたかなどについての話も大変興味の深いものであった。昔の話というのは、今のわれわれに対してつねに「鑑（鏡）」の役割を果すものなのである。

<学部消息>

2月理学部会合日誌

教授会メモ

2月18日(水)定例教授会

理学部4号館 1320

2月2日(月)	主任会議	1.30 ~ 3.00
9日(月)	理系委員会	2.00 ~ 4.30
10日(火)	教務委員会	1.30 ~ 4.00
10日(火)	将来計画委員会	3.00 ~ 5.00
16日(月)	理職定例交渉	12.30 ~ 1.30
18日(水)	人事委員会	11.00 ~ 11.40
"	教授会	1.30 ~ 4.40
25日(水)	主任会議	11.00 ~ 2.00

1. 前回議事録の承認
2. 人事移動等報告
3. 評議員改選
下郡山教授(植物)、西島教授(物理)が選出された。
4. 人事委員半数改選
海野教授(天文)、野田教授(生化)が選出された。
5. 会計委員半数改選
浅田教授(物理)、飯島教授(地質)、大木教授(化学)が選出された。
6. 人事委員会報告(末元)
7. 教務委員会報告(鈴木)
8. 将来計画委員会報告(黒田)

人 事 異 動

[助手]

教室	官職	氏名	発令年月日	異動内容	備考
臨海実験所	助手	小林浩士	51. 4. 1	千葉大学助教授昇任	教養部
地 理		久保幸夫	51. 3. 1	助手に採用	

[講師以上]

教室	官職	氏名	発令年月日	異動内容
数 学	助教授	小松彦三郎	51. 2. 1	教育職(一)1等級(東京大学教授理 学部)に昇任させる

2 月 海 外 渡 航 者

所 属	官 職	氏 名	渡 航 先 国	渡 航 期 間	渡 航 目 的
物 理	教 授	小 柴 昌 俊	ド イ ツ 連 邦 共 和 国	2.23~3. 5	陰陽電子衝突装置による物理学に関するシンポジウム出席
化 学	教 授	朽 津 耕 三	ア メ リ カ 合 衆 国	2.24~3.15	「気相分子構造」に関するシンポジウム出席及び研究連絡
物 理	教 授	藤 井 忠 男	イ タ リ ア	2.26~3.11	PETRA 実験に関する会議出席及び研究連絡
情 報 科 学	助 教 授	国 井 利 泰	ア メ リ カ 合 衆 国	2.28~3.15	ソフトウェア科学の研究現状調査
物 理	助 手	永 宮 正 治	ア メ リ カ 合 衆 国	2.10 ~ 11. 1	原子核物理学の研究
物 理	助 手	中 村 健 蔵	ス イ ス	2.27 ~52.2.26	素粒子物理学の実験的研究
地 球	助 手	新 田 勅	ア メ リ カ 合 衆 国	2.29 ~52.3. 2	熱帯気象の研究

理 学 博 士 学 位 授 与 者

専 門 課 程	氏 名	論 文 題 目
物 理 学	伊 藤 浩 子	Nuclear Orientation of Bismuth Isotopes in BiMn (BiMn 中での Bi 同位元素の核偏極)
同	木 下 一 彦	ナノ秒蛍光偏光解消法における基礎的方法の開発と生体系への応用
同	金 久 実	Thermodynamic Analysis of the Conformational Stability of Globular Proteins (球状蛋白質の構造安定性の熱力学的解析)
学 位 規 則 第 3 条 2 項 該 当	殿 塚 勲	$^{212}\text{P}_0$, $^{210}\text{P}_0$ の α -崩壊
同	菊 地 正 幸	Theoretical studies on the focal process of earthquakes: Applications of fracture mechanics (震源過程の理論的研究—破壊力の応用—)
同	羽 田 野 正 隆	地理学で使われる世界地図の投影法に関する研究
同	森 田 茂 之	A topological classification of complex structures on $S^1 \times \Sigma^{2n-1}$ ($S^1 \times \Sigma^{2n-1}$ 上の複素構造の位相的分類) Topology, 14 (1975), 13-22 に発表

編集後記

今月は、記事が多く発行が若干おくれました。執筆者は特に御紹介する迄ありませんが、OB(O Gと申すべきか?)の中村さんは、理学部化学を卒業後、昭和39年に生物化学の大学院を出、現在、三菱化成生命科学研究所の社会生命科学研究室長です。(中村さんのエッセイの標題は編集部でつくりました)。又、森野先生は、財団法人 相模中央化学研究所長として御活躍中です。名誉教授の御近況の中で、藤井先生が、御寄稿の表題についてコメントをのべられておりますが、先生御指摘の通り、御原稿には“雑感”という題がついておりました。只、編集部の判断で、中国人商人の“尊い人”という言葉が大へん印象的でしたので、改題させて頂いたわけで他意はありませんでした。先生及び読者の御了承を得られればと存じます。

又、本号を以て、古生物写真の連載も終わりました。花井先生を中心とする執筆陣の御努力に厚く感謝いたします。尚、裏表紙の写真は、中央事務の久我正弘氏の御協力によるものです。

◇◇◇

早咲きの桜もそろそろ散りはじめる今日此頃、今期編集委員会として最後の号をお届けするのは、いささかの感慨をもよおさざるを得ません。植村先生から新しい形の広報をと、大変鄭重な御依頼を受け、新部長の熱意にほだされてお引受けした当時、まず第一に考えられたことは、“紙屑箱に捨てられない小冊子”ということでした。見本としては、アジア・アフリカ言語文化研究所の「通信」が大へんよくできているので参考とし、表紙の写真欄などもそれにヒントを得ました。ささやかなる体験ですが、米国の大学などで講義をしていたとき配られた学内ニュースや広報のようなものも参考にしました。東大内の各種の類似の刊行物もとりよせてみましたが、当時のものは新方針にあまり参考になりませんでした。福島先生に始まる理学部弘報の持味を失わず、しかも新味を出すのは、大変な仕事でした。

何とか、理学部の皆さんに親しまれるものにした、お互何をやっているかわからないという間隙をなるべく少なくしたい、理学部のいろいろな構成員間の心の交流を少しでもはかりたい……と、最初はいろいろな考え方がありました。広報は一種の学部内ジャーナリズムですが、世間のいわゆるジャーナ

リズムからは、たえず、数歩さがったおちついた姿勢はとりつづけたつもりであります。私自身は、諸専門科学にきわめてくらく、難しい原稿は、正直のところ、内容はわかりませんでした、何れも執筆者に対する100%の信頼の下に編集をすすめました。只私が二号館の一角に所属しており、山上会議所という絶好の取材場所で食事をする事が多く(そのために食事がまなくなった被害者も少くないときき恐縮の至りですが)無意識のうちに、執筆依頼がそれらの周辺に偏ったのではないかとおそえています。次期編集委員にひきつぎました先生方の顔写真つきの執筆台帳は、どの頁も半分以上埋っており、一人で数編も御執筆頂いた方もあります。又、名誉教授の先生方からは、度々御寄稿、御教授を頂き恐縮いたしております。只、大学院生前後の若い諸君や、事務の方々にもう少し書いて頂きたかったのが果せず、残念に思います。

◇◇◇

編集後記の筆をおくにあたって一言御礼の言葉をのべさせていただきます。

第一に、全く自由な編集を委して下さった植村先生、それに3年の間、出張勝ちで生来散漫な私をよく助け、協力して下さった清水、木下、猪木の共同編集委員の先生方。

第二に、わがままな註文をきき、執筆して下さったすべての執筆者。

第三に、裏方に徹して、貴重な記事をつくって下さった吉野事務長以下学部長室、学部事務、又関係各教室の事務の方々。

そして最後に、誠実な紙面作りをして下さった国際文献印刷社及び林工房の関係者の方々。

以上の方々のお理解と庇護がなければこの広報は今日迄存続しなかったことでしょう。新年度から、木下先生を中心に、新しい編集委員会で広報が続刊されます。広報の一層の発展に夢を託しつつ、これを以て退陣のあいさつに代えさせていただきます。

(小堀 巖)

追伸：今月で私と一緒に編集委員を去る猪木先生は3月末米国へ出張されましたので御自身でごあいさつを書けませんでした、皆さんによろしくとのことでした。

編集：

〔小堀 巖(地理) 理2号館205号室 内線6449〕
〔木下清一郎(動物) 理2号館22号室 内線3361〕
〔猪木慶治(物理) 理1号館461号室 内線2668〕